未来に向けて

森　壽作

野間清治顕彰会は今から七年前に産声をあげた。創立時に提唱された会の活動方針のもとに、十月の顕彰碑建立記念献花式も定着化し、野間文庫読書推進賞も一昨年から実施されるようになりました。又、郷土の先覚者を紹介する「ふるさとの風」も4号まで継続的に毎年発行され、昨年は更に「郷土文芸読本」も加わりました。文化講演会、文化展、研修視察旅行等々着実にその実績を重ね、顕彰会がより充実した活動する組織になりつつあります。特に、早期実現が困難とも思える「野間清治記念館建設」プロジェクトチーム発足の意義は大きい。未来に向けての活動開始は様々な広がりを持つロマンそのもの。「どのような記念館をどのように建設するのか」これから皆で、その実現に向けての研究に取り組んで行くことになりました。先ずは既存の諸記念館を視察するところから始まるわけですが、昨秋の第七回視察研修会での岩波書店の「故郷」と言われる「信州風樹文庫」や、筑摩書房の創立者の記念館「古田晃記念館」の訪問は予期せぬ成果がありました。記念館の建物の素晴らしさ以上に、記念館建設に至るまでの背景、より良い社会を求めていこうとする関係者たちの熱い思いに接し、深く感動しましたが、その一方で、そのような思いが果たして我々にあるのだろうかと自問自答せざるを得ませんでした。しかし、その貴重な体験から「野間清治生誕の碑」建立の話が生まれました。野間清治が桐生市立南小学校の前身である新宿小学校の教員宿舎で生まれたことから、当然、碑の建立の場所は地元南地区と云うことになりました。その後、検討が重ねられ、本年一月に地元南地区関係者・野間清治顕彰会による「生誕の碑」建立実行委員会が発足し、現在、その実現に向けて進行中であります。その「生誕の碑」建立の先には記念館建設への会発足以来の計画があり、プロジェクトチームに大きく期待しているところであります。「志あるところ道自ずら生ず　これを追求することに真剣なれ　道は近きにあり」の野間清治の言葉は、正に、「真に豊な未来」に向けての羅針盤であると強く宣言したい。

生誕の碑建立実行委員会

―雑誌王・講談社創業者　野間清治―

平成十五年十二月十七日、「野間清治生誕の碑の建碑建立の実行委員会」（小林幸雄委員長）が南小学校校長室で開かれ、以後数度にわたって会議を重ねて、生誕の碑の意義・碑のスタイルなど南小学校周辺を散策し候補地など忌憚のない意見が取りかわされている。

野間清治は（1878～1938）山田郡新宿村（現在の桐生市新宿）に生まれ、桐生市内の学校の教師を務め、県立師範学校・東京帝国大学臨時教員養成所・沖縄中学校教諭などを経て、1909年東京本郷に大日本雄弁会を設立、雑誌「雄弁」「講談倶楽部」「少年倶楽部」「少女倶楽部」などを次々に創刊。日本の雑誌王と称された。

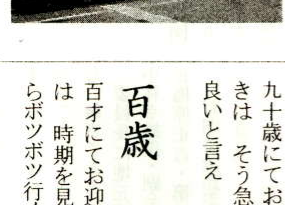
大川美術館長が野間清治について「渋沢栄一を越えてもそれ以下ではない」と表現し全国的知名度の高さに比して、地元の認識度は低い。住民運動まで高めて建碑するにはより周知を図って行くことが重要との確認がされ、啓発活動も同じ進行で取り組むことなど会合の中で話し合われた。

建碑候補地については選定協議中であるが、大きくは二つの観点に集約される。一つは「野間清治は全国的あるいは世界の雑誌王としての知名度と社会的業績を考えれば、桐生のシンボルとして、中通り線の緑地帯などを視野に入れた建碑が望ましい」との一案もある。

もう一つは、「野間清治の顕彰碑は既に図書館の庭に在るのだから、南小学校の先輩として、子供の教育的視点で考えたらとの意見で、碑は南小学校地内の象徴的な場所、例えば校庭のクスノキ木の下あたりで、常にこどもの手に触れられるのが望ましい。」

いま、この二つの視点からの意見で討議が進められている。

いずれにしても、文化を語れない町には発展はないことは、歴史が証明している。野間清治生誕の地元南地区の方々の先輩に続け、の合言葉と未来の桐生に夢を馳せた取り組みに、桐生の輝きが感じられるのである。



人生は七十歳より

長寿社会の中で、元気で溌剌と生きること、命に未練があるのではなくいつまでも社会に役立つて生きることを示している。

七十歳
七十にしてお迎えあるときは　今留守だと言え

八十歳
八十にてお迎えあるときは　まだまだ早いと言え

九十歳
九十歳にてお迎えあるときは　そう急がなくとも良いと言え

百歳
百才にてお迎えあるときは　時期を見てこちらからボツボツ行くと言え